






お願い



緊急事態

春日信彦



目次

シェルター

8月9日（日）長崎原爆の日。朝食を終えた亜紀は、さやかとアンナに敗戦について質問していた。亜紀は、学校で教えられる太平洋戦争について納得がいかないところがいくつかあった。侵略戦争を行った日本が、これ以上、残虐な戦争をしないように、世界の保安官であるアメリカが、広島と長崎に原爆を投下して、日本に降伏宣言をさせた、と日本史の授業で習った。このことが、特に、亜紀には納得がいかなかった。確かに、戦争を起こしたことは事実だったかもしれないが、何か、やむを得ない事情があったように思えてならなかった。亜紀には、日本人は温厚な人種で残虐な行為をする人種だとは思えなかった。アジアの東端にある小国の日本が、侵略戦争をするとは、まったく、理解できなかった。

亜紀は、アンナに尋ねた。「ね～、ママ。なぜ、広島と長崎に原爆が投下されたの？日本って、そんなに悪い国家だったの？」アンナは、首をかしげて返事した。「そんなこと言われても、わかんないわよ。でも、戦争はよくないと思うけど。戦争すれば、人は死ぬし、多くの人が苦しむじゃない。いったい、だれが得をするっていうの？戦争する国は、みんな悪いのよ。アメリカも、イギリスも、フランスも、ソ連も、中国も、ドイツも、イタリアも、日本も、みんな悪い。戦争なんか、やっちゃダメ。二度と、戦争しないように、みんなで、反戦運動しなくちゃ。さやかもそう思うでしょ」さやかは、うなずいた。「戦争をやっても、みんな苦しむだけ。何の得もない。得をするのは、勝った国家だけ。国家は、多くの兵隊を殺しても、勝てば、国家が偉いみたいにふるまうじゃない。国家って、自分勝手なのよ」

亜紀は、学校で、アメリカがやったことは正しいと習っていた。アメリカは、いつも正しいのだろうか？と疑問に思っていた。「アメリカって、世界中に軍事基地を作って、世界を守っているというけど、軍隊がなければ世界は平和にならないの？おねえちゃん」さやかは、返事に困ったが、自分の考えを述べた。「そうよね。平和って、何だろう？軍隊がなければ、平和になれないのかしら？これは、永遠のテーマかも。バカげてると思うけど、今のところは、核武装で平和が保たれているのよ。日本は、核兵器を持っていないけど、原発を使ってプルトニウムは作っているし、米軍の子分のような自衛隊があるじゃない。日本も、結局は、軍隊を持っているようなものね。もし、第三次世界大戦が起きたら、米軍と一緒に戦うことになるのよ」

アンナは、太平洋戦争について知識はなかったが、日本が侵略戦争をするような国家だったことに疑問を持っていた。「さやか、日本って、好戦的な国家だったの？ 本当に、世界を制覇しようと戦争を起こしたの？ どうしても、信じられないのよね。みんな、頭がおかしくなっていたの？」さやかは、うなずいた。「アンナが、そう思うのも、もっともよ。学校では、教えないけど、日本は、侵略戦争をやったんじゃないのよ。日本を悪者に仕立て上げたのは、戦勝国なのよ。確かに、日清戦争、日露戦争、第一次世界戦争、第二次世界大戦をやったことは、よくないかもしれない。でも、戦争には、隠された事情というものがあるのよ。知ってるでしょ、アジア諸国は、欧米の植民地だったでしょ。アジア諸国は、独立したかったのね。日本も、いずれ、植民地になるところだし」

亜紀は、大ききうなずいた。きっと、学校では教えない戦争の事情があるに違いない。歴史教科書が、真実を伝えているとは限らない。「おねえちゃん、日本は、独立戦争をやったってこと？」さやかは、うなずいた。「はっきり言えば、そういうこと。日本は、アジア諸国を独立させるために戦争したの。だから、アジア諸国にとっては、正義の国家。戦争がいいとは言えないけど、戦わなければ、アジア諸国は、いつまでも、植民地だったと思う。今も戦争は、続いているじゃない。巨大軍隊を持つアメリカとロシアが、世界を支配している限り、独立戦争は続くのよ」アンナは、尋ねた。「独立戦争が続くと言ったけど、日本は、もう、独立戦争をしないの？ 日本は、いつもアメリカにペコペコして、アメリカの悪口を言わないでしょ。今でも、日本はアメリカの植民地じゃないの？」

亜紀もうなずいた。日本は、アメリカの植民地に違いない。米軍基地はあるし、政府は、アメリカに一切逆らわない。いつも、アメリカの言いなり。「ママが、言う通りよ。日本は、アメリカの子分よ。日本は、独立なんかしてない。いつになったら、日本は、独立できるの？」さやかは、二人を説得するには、戦争を肯定せざるを得なくなった。「そうね、日本は独立していない。だからと言って、そう簡単に、独立はできない。独立しようとするれば、核兵器を使って、戦争をすることになる。核兵器を使えば、世界中のみんなが不幸になる。こんなことは、できない。日本人には、できないのよ。でも、本当に独立しようとするれば、戦争になる。これが、国家なのよ。戦争は、人類の宿命かも？」

亜紀は、戦争がなくならないことを悟り、がっかりした。「つまり、国家がある限り、

永遠に戦争はなくなる、ということね。ということは、また、戦争が起きるってことよね」さやかは顔が暗くなった。小さくうなずき、話し始めた。「おそらく、近い将来、アジアで、日本も参戦する戦争が起きるんじゃないかしら。困ったものね」即座に、亜紀が尋ねた。「え、いったい、どこで戦争するの？ アメリカ？」さやかは、緊張した表情で返事した。「アメリカとは戦わないわ。アメリカの子分だもの。万が一、戦争が起きるとすれば、アメリカと中国ね。中国は、グローバル経済を利用して、アメリカを経済破綻に追いやったの。さらに、米軍の弱体化に乗じて、東南アジア諸国に圧力をかけてるの。だから、アメリカは、反撃に出るはず。一触即発って感じ」

亜紀が、日本の立場を話し始めた。「つまり、アメリカと中国が戦争すれば、日本は、アメリカと一緒に中国相手に戦争することになるのね。中国と日本は近いじゃない。中国が日本に核ミサイルをぶち込むってこともあるよ。しかも、原発にぶち込まれたら、日本は放射能だらけで、住めなくなる。どうすればいいの？ いったい、どこに逃げればいいの？」さやかの顔から血の気が引いた。「万が一、核ミサイルが原発に命中すれば、日本は終わり。人が住める島じゃなくなる。オーストラリアにでも逃げることであればいいけど、みんなが、逃げられるとは限らない。多くの人が、死ぬ。覚悟する以外ないわね」アンナの「ギャ〜〜」という悲鳴が部屋中に響き渡った。「戦争なんて、イヤよ。死にたくない。原爆なんて、まっぴらよ。さやか、どうにかならないの？」

さやかは、腕を組み「ウ〜〜」とうなり声を上げた。「唯一の救いは、コンペーが頓死してくれることね。神頼みだけど」アンナは、お祈りを上げ始めた。「神様、どうか、コンペーちゃんが一刻も早く、天国に行きますように。コンペーちゃんは、決して悪い人ではないんです。ただ、天狗になっただけなのです。だから、地獄ではなく、天国に連れて行ってあげてください。お願いいたします」亜紀は、あきれた顔でアンナを見つめた。「ママ、ちょっと、いい加減なお願いはやめてよ。神様をお願いしたからって、コンペーが、死ぬわけ、ないじゃやない。もっと現実的に考えてよ」アンナは、口をとがらせて、返事した。「だったら、亜紀、どうすればいいっていうの？ か弱い女性は、お願いする以外ないじゃない。これが、現実なの」

4

どうすればいいの？ と問われた亜紀は、返事に困った。「私だって、わからない。中国には、コンペーを諭してくれる賢くて、権力がある人はいないの？ きっといるはずよ」

さやかが小さくうなずいた。「国家主席のコンペーは、中国共産党の最高権力者。だから、彼には逆らえない。でも、長老たちの意見は無視はできないはず。長老たちは、戦争に反対するはずよ。今、アメリカ相手に戦争したら、世界を敵に回すようなものじゃない。きっと、中国は、徹底的にやられる。そんなバカげた戦争を長老たちは許すはずがない。コンペーが戦争をやると言い張れば、きっと、クーデターが起きて、暗殺されると思う。結局、コンペーは、アメリカに屈服するんじゃない」

アンナは、うなずいたが、戦争になった時のことを考えると不安になった。「でも、本当に戦争になったら、どうしよう。どこに避難すればいいの？ 防空壕掘って、隠れるの？」さやかが、ポンと胸をたたいた。「いざという時のために、隠れるところは作ってあるのよ。と言っても、作ったのは、拓也なんだけど」アンナは、目を丸くして尋ねた。「え、拓也が。どこにあるのよ、言いなさいよ、さあ」亜紀も教えてほしかった。「おねえちゃん、どこなの？ 近くなの？」ニコッと笑顔を作ったさやかは、返事した。「ここだけの話よ。誰にも言っちゃダメ。拓也は、いざという時のために、シェルターを作ったの」さやかは、右手の親指を下に向けた。さやかのジェスチャーを見た亜紀は、即座に親指の意味を察した。「わかった、この地下ってことね。さすが、パパ。あったまい〜」

アンナは、初めて聞かされたことにふくれっ面になった。「なによ、今まで黙っているなんて。拓也ったら、さやかにだけ教えて。さやか、こんな重要なこと、どうして黙っていたのよ。もっと早くに教えてもいいじゃない。いじわるなんだから」さやかは、両手を合わせて頭を下げた。「ごめんなさい。さやかも、すっかり、忘れていたのよ」亜紀が興味津々なまなざしで尋ねた。「おねえちゃんは、シェルターに入ったことがあるの？」さやかは、囁いた。「それが、まだなの。入り口は、教えてもらったんだけど、一人で入るのが怖くて」即座にアンナが尋ねた。「どこよ、入り口は？ みんなが知ってないと避難できないじゃない。テーブルの下ににあるのね」

5

さやかは、コツンコツンとフロアを踵（かかと）で蹴った。「ここね」亜紀も踵でコツンコツンとフロアを蹴ってみた。アンナが、確認するように尋ねた。「テーブルの下に、入り口があるのね」さやかは、ゆっくりうなずいた。立ち上がったアンナは、腰をかか

めてテーブルの下を覗いた。「え、ここが入り口？ どうやって入るのさ。さやか、さあ、ドアを開けなさいよ」さやかは、立ち上がると二人に声をかけた。「初めてって、言ったじゃない。まず、テーブルとカーベットを動かしましょう」三人は、テーブルを南側のリビング方向に移動させた。そして、テーブルの下に敷かれていたカーベットを取り外した。ゆっくりと腰をかがめたさやかは、名探偵が手掛かりを探すかのように一枚のパネルをじっと見つめた。一瞬、目を輝かせたさやかは、小さな溝に人差し指を差し込んで、そっと引き上げた。すると、その中には銀色のドアの取っ手があった。「アンナ、これがドアの取っ手。これを引き上げれば、階段があるはず。拓也が、言ってた」

アンナはさよかの横に腰をかがめた。「これを引っ張ればいいの。そいじゃ、あとは、アンナに任せて」アンナは、右手を取っ手にかけるとゆっくりと引き上げた。でも、全く、動かなかった。「動かないじゃない。どうして？」即座に、亜紀が返事した。「ママがドアに乗ってるからじゃない。反対側から引き揚げてみて」アンナは、南側に移動し、ゆっくり真上に引き上げてみた。すると、1メートル四方のパネルが開いた。亜紀が、叫んだ。「開いた。ここから、入るのね」アンナは、ドアをさらに引き上げ、180度回転させ北側に倒した。アンナは、中を覗き込みつぶやいた。「真っ暗ね。え、これって、階段じゃない。ただの梯子（はしご）。中がよく見えないわね。亜紀、懐中電灯持ってきて」

亜紀は、即座に、食器棚の引き出しに入れてある懐中電灯を取りに行った。駆けて戻ってくると、アンナに手渡した。アンナは、懐中電灯のお尻のスイッチをプッシュして、明かりをつけた。明かりをシェルターの底に向けて照らしすと南側に小さな部屋があるように見えた。「さやか、椅子も机もないみたい。単なる洞窟みたい。入ってみようか？」亜紀が、返事した。「入ってみよう。みんなで、入ってみようよ。いざという時のために、訓練しなくっちゃ」さやかは、気味が悪かったが、つぶやいた。「そうね、訓練しなくっちゃね。まずは、アンナが降りて、さやかは、後で行くから」さよかの弱虫と思ったが、アンナは、先頭きって降りることにした。「幽霊が出るわけじゃなし、何、怖気（おじけ）づいてるのさ。まったく、さやかは、弱虫なんだから」

6

謎の巻物

アンナは、懐中電灯のストラップを首にかけると大きく深呼吸をした。懐中電灯は、足を照らしていた。地面から垂直に立っている鉄の梯子に、まず右足を乗せ、踏み外さないように、左足、右足、とゆっくり足をかけて降りていった。梯子の長さは、約3メートルほどで、すぐに床に到着した。首にかけていた懐中電灯を右手に持ち、あたりを照

らしてみた。グレーの壁は、セメント壁のように見えた。アンナは、入り口に向かって叫んだ。「洞窟みたいなものね。何にもない。さやかも降りておいでよ」さやかは、踏み外して落ちこちそうな気がしたが、勇気を振り絞って降りることにした。「わかった。今降りる」亜紀も返事した。「ママ、亜紀も降りてみたい」アンナが、大きな声で返事した。「いいわよ。亜紀もいらっしゃい。落ちこちないようにね」

さやかは、恐る恐るゆっくりと降りて行った。亜紀も足元に気を付けてゆっくり降りて行った。「ママ、ひんやりして、気持ちいい」アンナは、隅々まで明かりを照らした。南東方向の隅を照らした時、懐中電灯を止めた。「さやか、あれ何かしら？ 茶筒のようなものがあるわよ。さやかと亜紀は、明かりに照らし出された小さな筒に目をやった。亜紀が声を発した。「なんだろう？ 宝物かな～？ パパからのプレゼントかも？」アンナは、小筒に目を近づけた。じっと、目を凝らしてみると直径10センチ、高さ10センチぐらいの茶色の小筒だった。アンナは、懐中電灯を左手に持ち替え、右手で小筒をつかんだ。まったく重みを感じなかった。「すっごく軽い。何か入ってるのかしら？」手にした小筒をさやかと亜紀に見せた。

亜紀が奪うように小筒を手にとった。「ほんと、軽い。おねえちゃん、持ってみて」さやかは、気味が悪かったが、そっと小筒を手に取り、軽く左右に振ってみた。すると、カラカラとちっちゃな小石が壁にぶつかる時のような音がした。「何か、入ってるわね」亜紀が、さやかに声をかけた。「開けてみて」さやかは、顔をこわばらせて返事した。「ここは、暗いから、キッチンに戻ってから開けてみましょう。亜紀、先に上がって」入り口の明かりに照らされた梯子に安心感を得た亜紀は、子ザルのように素早く駆けあがっていった。亜紀は、入り口からシェルターの底に向かって声をかけた。「ママ、おねえちゃん、早く」亜紀は、宝の小筒のように思えて、ワクワクしていた。さやかは小筒をアンナに手渡し、ゆっくり梯子を登っていった。アンナは、亜紀に声をかけた。「亜紀、小筒を放り投げるから、キャッチするのよ。いい。投げるわよ」アンナは、入り口めがけて小筒を勢いよく放り投げた。

7

投げ上げられた小筒は、入り口から1メートルほどの高さに飛び出してきた。亜紀は、両手で素早くキャッチした。「ヤッター、ママ、バッチシ、早く、上がってきて」宝物を掘り当てた探検家にでもなった気分のアンナは、ドヤ顔で上がってきた。ヒョイと右手でシェルターのドアを閉じると二人に声をかけた。「カーベットを敷いて、テーブルを元に戻すのよ。さあ」胸を躍らせた亜紀も小さな手でテーブルの端っこを持って、手伝った。さやかとアンナがテーブルに着くと亜紀は、椅子の上に置いていた小筒をテーブルの中

中央に置いた。亜紀が問いかけた。「誰が開けるの？」さやかもアンナもじっと小筒を見つめていた。アンナが、返事した。「誰って、さやか、開けなさいよ。シェルターを知っていたのは、さやかなんだから」さやかは、気味が悪くて、開けられそうになかった。

さやかは、何が入っているかみんなで考えてみることにした。「そう、焦らずに、何が入っているか、あてっこしない？ カラカラって、音が鳴ったじゃない。それをヒントに考えてみようじゃない」亜紀が、元気よく返事した。「やるやる。これから、みんな名探偵コナンってわけね。小筒は軽かったでしょ、しかも、カラカラって音が鳴った。中に入っているのは、ちっちゃなもの。しかも、高価なものに違いない。う〜、パパからのプレゼントでしょ。だれへのプレゼントなのか？ ママか？ それとも、亜紀か？ それとも、拓実か？ いや、さやかおねえちゃんかも？ あ〜、ムズイ。ヤッパ、ママへのプレゼントだと思う。ママが喜ぶものといえば、何か？ あ、指輪。そう、ダイヤの指輪だと思う」

さやかが、パチパチと拍手した。「さすが、亜紀ちゃん。いい線行ってると思う。それでは、アンナの推理は？」アンナは、プレゼントとは思えなかった。「そうね〜、亜紀が言うようにちっちゃなものよね。しかも、カラカラって音が鳴るということは、ちょっと硬いものじゃない？ 拓也が残すものといえば、拓也の形見かも。拓也の形見でちっちゃなものといえば何か？ あ、みんなに伝えたい何かをかき込んだメモリーカード。きっとそうよ。次は、さやかの番。どうぞ」さやかは、アンナと同じ考えだったが、同じでは、面白くないと思い、何かひらめかないかと首をかしげて考え込んだ。アンナがせかした。「早く、言いなさいよ」

8

さやかは、腕を組み、ウ〜と唸り声を上げた。「小さくて、ちょっと硬くて、拓也の思いが込められたものよね。拓也だから、凡人がするプレゼントじゃないわね。一般人が、高価と思うものじゃなくて、私たちにとって、貴重なものとはなにか？ 遺言みたいなものか？ 手紙だったら、ちっちゃくないだろうし。拓也が大切にしていたものかも。いや、シェルターにあったわけだから、緊急避難と関係あるもの？ あ、戦争と関係あるものかも？ いや〜、やっぱ違う。あ、極秘のマイクロフィルムかも。何か、重要なことが写っているフィルム。そう、マイクロフィルム」意見を述べ終えた三人は、顔を見合わ

せた。アンナが、つぶやいた。「誰が当たっているかは、開けてのお楽しみ。さやか、開けなよ」さやかは、開けると白い煙が舞い上がってくるんじゃないかとビビってしまった。

さやかは、両手を握りしめ、じっと見つめるばかりで、手に取ろうとしなかった。「さやか、何やってるのよ。さあ、開けなよ」さやかは、目じりを下げて、つぶやいた。「アンナに任せる。アンナ、開けて」臆病者のさやかにあきれたアンナは、小筒を手にとった。「それじゃ、開けるわよ。いい」アンナは、小筒の上蓋を引っ張り上げるとポンという音が鳴った。亜紀は、即座に、覗き込んだ。亜紀の目は、点になり、顔を持ち上げた。「なにこれ？」さやかも覗き込んだ。さやかも怪訝な顔でアンナに声をかけた。「なんだろうね～。小さな巻物みたいだけど」アンナは、親指と人差し指で3センチほどの長さの巻物をつまみ上げた。そして、しばらく見入ってしまった。「確かに、巻物ね。忍術の虎の巻かも？」さやかは、クスッと笑い声をあげた。さやかは、巻物に目を近づけた。「まさか、でも、何の巻物だろう？ とにかく見てみましょう」

アンナは、指先が器用な亜紀に開けさせることにした。アンナは亜紀に声をかけた。「亜紀、手を出して」亜紀は、右手の掌を上に向けて差し出した。アンナは、時限爆弾を置くかのようにそっと亜紀の掌の中央に置いた。「亜紀、そっと紐をほどいてみて。破らないようにね」亜紀は、左手の親指と人差し指で、紐の一方をつかみ上げた。次に、右手の指先でもう一方の紐の先をつまみ、紐を左右に引っ張った。紐は、切れずに解けた。さらに、紐をゆっくり緩め、完全に紐を巻物から取り去った。アンナが、声をかけた。「上手じゃない。何が書いてあるか？ 楽しみね。広げてみて」亜紀は、小さな巻物をテーブルの上において、巻物の紙が破れないようにゆっくりと転がしながら開いていった。すると、奇妙な文字が現れた。アンナは、へんてこりんな文字を見て顔をしかめた。「なによ、この文字」

9

さやかも顔をしかめてつぶやいた。「英語じゃないことは確かね。亜紀ちゃん、読める？」亜紀もしかめっ面になって返事した。「わかんない。こんな文字初めて見る。なんとなく、アラビア文字に似てるような」さやかは、しばらく文字を見つめた。「アラビア文字のような、サンスクリット文字のような、ヘブライ文字のような、そんな感じね」アンナが、がっかりしたようなため息交じりの言葉をつぶやいた。「詰まんないの。拓也ったら、バッカじゃない。こんな、訳の分からないものを小筒に入れておくんて。てっきり、ダイヤの指輪だと思ったのに。ア～ア、ついてないの」さやかは、書いてある

内容に興味が出てきた。「拓也のことだから、全く、無意味なものじゃないわよ。きっと、何か重要なことが書いてあると思うよ。どんなことが書いてあるんだろう。誰か、読める人はいないかしら？」

アンナが、吐き捨てるように言った。「誰も読めっこないわよ。こんなへんてこりんな文字。まあ、考古学者だったら読めるかもね？でも、そんな知り合いいないし～～」亜紀も何が書いてあるか興味が出てきた。「誰か、読める人いないかな～～。AIティーチャーなら、読めるかも？」さやかが、笑顔で返事した。「それは、名案ね。早速、読んでもらいなさい」アンナが、即座に、口をはさんだ。「それは、ダメよ。二人とも、バツカじゃないの？シェルターの隅っこに隠してあったのよ。ということは、超極秘ということじゃない。我々だけの秘密ってことよ。AIなんか知られたら、宝を横取りされるわよ。とにかく、我々だけで解読するのよ」亜紀は、首をかしげて返事した。「でも、ママ。この文字は、何語の文字かもわからないし、果たして解読できるかどうか？」さやかも同感だった。「私たちだけでは、ムリよ。誰かに解読してもらわないと」

アンナは、二人の意見を聞いて、解読する気持ちがなえてしまった。「そうね。こんな文字、解読できるはずないか。いったい、どうすりゃいいの？拓也のヤツ、とんでもなもの残しやがって。ア～～いやになっちゃう」三人は、途方に暮れていたが、亜紀が、ボンと両手を打った。「もしかしたら、お兄ちゃんだったら、解読できるかも。パパと同じ、数学の天才なんだから」アンナが目を丸くして応答した。「あのブサイク。まあ、そうね～、ブサイクを仲間いれるってことか。それも悪くないか。今のところ、私たちだけでは、どうにもならないし。さやかは、どう思う？」さやかは、笑顔で返事した。「それは、名案じゃない。鳥羽君だったら、いろいろと調べてくれそうじゃない。きっと、解読できると思う。鳥羽君を仲間に入れようよ」三人は、顔を見合わせて、うなずいた。

10

転校生

その日の夕方、明菜が福岡市立H中学からの転校生、時仁（ときひと）を連れて遊びに来ることになった。時仁は、明菜の家の200メートルほど南側で、かつて住んでいたヒフミン家の北側寄りの隣に引っ越してきた。時仁は曾根に引っ越してきたちょっと変わった男子ということだった。午後2時過ぎに明菜と時仁がやってきた。明菜がインターホンを鳴らすと亜紀はスキップしながら玄関に向かった。「どうぞ」明菜は、ドアを開くと笑顔で挨拶した。「ハロ～～」亜紀も元気よくあいさつした。「ハロ～～、いらっしやい。お友達は？」明菜が玄関内に入ると後から浅黒い顔の男子が入ってきた。「こ

んにちは。九条時仁（くじょうときひと）といいます。よろしく」亜紀もあいさつした。「初めまして、関亜紀です。よろしく。上がってください」

亜紀は、二人をキッチンに案内した。二人がテーブルに着くと亜紀は、グラスをテーブルに並べ、ペットボトルのファンタオレンジをフレッヅから取り出し、グラスに注いだ。「はいどうぞ」時仁は、笑顔でお礼を言った。「ありがとう。今年は、猛暑だよな。俺なんか、一日2回、シャワー浴びてるんだ。ここに来るまでに、シャツは、汗でびっしょりだ。全く、いやになるよ」亜紀も今年の猛暑には、うんざりしていた。「ほんと、暑いね。大雨の次は、猛暑。ここ数年、異常気象じゃない？ 最悪なことに、コロナパンデミックじゃない。マスクにフェイスシールドで、勉強しろっていうし。突然、一か月以上のコロナ休校でしょ、休み明けからは、授業の遅れを取り戻すために、毎日6時限の授業。やってられないよ。楽しみにしていた夏休みは、スズメの涙のような夏休み。ア〜〜ムかつく」時仁が、ワハハと大きな笑い声をあげた。「イヤ〜、まったく。亜紀さんは、見かけによらず、おもろいな〜」

明菜がうなずいた。「まったく、いやになっちゃう。早く、コロナ、消えてほしい」時仁が、話をつないだ。「まったく、もう、うんざりだ。毎日、毎日、ニュースで感染者の数を叫ぶし、いい加減にしろってんだ。気が変になる」明菜が、時仁に笑顔に向けて話し始めた。「時仁君。早く、ワクチンができるといいね」時仁は、即座に返事した。「ワクチンね〜。十分な検証をしていないロシアのワクチンは、お断りだけどね」亜紀が話を補った。「そもそも、RNA ウイルスのワクチンって、ほとんど、効果がないの。インフルのワクチンも、お守りみたいなもの。政府は、バカ騒ぎしてるけど、コロナって、風邪となじ。メディアが最悪のウイルスみたいに報道するのが間違。感染しても、通常の免疫力があれば、ほとんどの人は、重症にはならないんだから」

11

亜紀は、一呼吸してさらに話を続けた。「自粛、自粛って、叫んだかと思えば、Go To キャンペーンでしょ。矛盾してない。政府って、頭おかしいおかしいんじゃない」明菜も大きくなずいて応答した。「そうよ、そうよ、政府って、絶対、頭おかしい。Go To キャンペーンやって、感染者が増大したじゃない。何のために、自粛、頑張ったの。休校ばっかで、授業は遅れるし、受験生なんて、踏んだり蹴ったりじゃない。もっと、学生のことを考えてほしいよね」時仁が、大きくなずいた。「そうだよ。最悪なことに、バイトができなくて、授業料や下宿代が払えず、退学した大学生がいるというじゃないか」

亜紀が、目を吊り上げて応答した。「何考えてるのよ、政府は。多くの中小企業が倒産

し、そのうえ、将来を悲観して、自殺した経営者がいると聞くじゃない。コロナなんて、インフルと同じなんだから、医療体制をきちんとやってれば、こんなことになっていなかったのよ」明菜が、悲しげな表情で応答した。「ア～～、もう、日本人はダメかも。あとは、神様にお願いする以外ない。神様、お願いします、日本を助けてください」時仁も同感だった。「いまの政府じゃ、ダメだ。藤原氏の氏神、春日大明神にお願いしよう。それと、天皇制にして、藤原氏が政治をやれば、きっと、日本は復興する」亜紀が、怪訝な表情で応答した。「え、天皇制は、わかるけど、藤原氏って何よ。藤原氏って、平安時代の話じゃない」

時仁は、マジな顔つきで返事した。「いやいや、藤原氏は、今も、健在さ。五摂家に任せていけば、こんな無様な政治になっていないさ。でも、今のところ、五摂家の権力は、今一つだからな。情けないよ。俺が、頑張る以外ない。きっと、かつての五摂家の隆盛を取り戻してやる。よし、頑張るぞ」明菜が、尋ねた。「時仁君は、五摂家なの？」ドヤ顔の時仁は、返事した。「もちろんさ、近衛家、九条家、二条家、一条家、鷹司家（たかつかさけ）、これが五摂家さ。俺は、九条家。きっと、摂政になってやる。頑張るぞ～～」亜紀が、ケラケラ笑い声を上げた。「ちょっと、今時、摂政はないでしょ。目指すんなら、総理大臣でしょ。時仁君って、平安時代の人みたい」明菜が、ちょっと変わっているといっていた意味がようやくつかめた。

12

亜紀は芸能活動ができない明菜を励ますことにした。「明菜ちゃん、せっかくアイドルになれたのにライブができなくなって残念ね。こうなったら、アイドルユーチューバーになれば？」明菜が返事した。「そうなのよね。ついてないのよ。このままじゃ、旬が過ぎて、アイドル人生終わりかも？ ユーチューバーね～、うまくいくかな～。やってみるか？」時仁は、励ました。「明菜は、チョ～カワイ～。登録者 100 万人突破、間違いなし。チャレンジあるのみ」亜紀も励ました。「明菜ちゃんだったら、きっと、世界的アイドルになれると思う。やりなさいよ。ガンバ」明菜は、ユーチューバーをやってみることにした。「よし、やってみる。応援してね」亜紀と時仁は、大きな声でエールを送った。「ファイト、アキナ～～！」

亜紀は、ちょっと風変わりな時仁に興味がわいてきた。「時仁君、部活は？」時仁は、目を輝かせて返事した。「野球部。それと、歴史部。どちらかという、歴史部が好きなんだ。今、神宝がどこにあるか、調べてるんだ。きっと、日本のどこかにあるはずなんだ」亜紀は、尋ねた。「神宝って、三種の神器のこと？」時仁は、即座に返事した。「日本の今ある三種の神器は、全部形代さ。第10代崇神（すじん）天皇が形代を山ほど作ったんだ。本物のありかは、だれも知らない。俺は、三種の神器には興味がない。俺が調査しているのは、ソロモンの秘宝なんだ。南ユダ王国がバビロニアに攻撃される前に、ユダ王族とレビ人がタルシン船に乗って、日の出国の日本に運んできた可能性があるんだ。俺が探し当てたいのは、ソロモンの秘宝の一つ”アロンの杖”なんだ。この杖は、奇跡を起こすことができるんだ。きっと探し出して、俺は、天下を取る」

時仁は、ちょっと変わっているとは思ったが、話を聞けば聞くほど、かなり変わってするように思えてきた。「それで、何か手掛かりがつかめたの？」時仁は、首をかしげて返事した。「いや、今のところ、手掛かりなし。でも、きっと、日本のどこかにあるはずなんだ。ちょっと、気にかかっているところは、剣山（つるぎさん）、高野山（こうやさん）、六甲山（ろっこうさん）、なんだ。あくまでも、直感なんなんだけどね。あまりにも、漠然としているから、一生かかっても、見つからないかもな。でも、俺のロマンってやつさ」確かに夢物語のように思えたが、生き生きとした表情を見せる時仁が、亜紀にはかっこよく見えた。「男のロマンね、いいじゃない。好きよ、そうゆうの」明菜も草食系の男子と違った情熱的な時仁をかっこよく感じていた。

13

亜紀は、話が盛り上がり喉が乾いてきた。「スイカ、食べる？」時仁は、大きな声で返事した。「ヤッター、俺、スイカ、大好きなんだ」亜紀は、フレッジから4分の1に切られたスイカを取り出してきた。「これ、切るわね」亜紀は、まな板と包丁を持ってきた。次に、小皿とスプーンを食器棚から取り出した。ゆっくりと丁寧にスイカを切ると扇形のスイカを一個ずつ小皿に乗せた。「はいどうぞ」時仁は、満面の笑みで応答した。「いただきます～～す」小皿には、スプーンを付けてあったが、時仁は大きな口を開けて、かぶりついた。豪快に食べる時仁の姿を見ていた亜紀と明菜は、男のたくましさに圧倒された。明菜が、心配して声をかけた。「種は、出したほうがいいんじゃない」時仁は、うなずきながら、笑顔で返事した。「あ～、でも、種を食ったぐらいじゃ、人間は、死なないさ。あ～～、うまいな～～」

時仁は、一切れをあっという間にたいらげた。亜紀は、もう一切れ時仁に勧めた。「もう一つ、食べる？」時仁は、恐縮した表情を見せたが、元気よく返事した。「かたじけない。いただきます」亜紀は、時仁の小皿に扇形の一切れを載せた。笑顔を見せた時仁は、またしても、勢いよくかぶりついた。「そう、お母さんが言ってんだけど、スイカには、シトルリンがたくさん入っていて、血行が良くなるんだって。だから、美容にいい、って言ってた」その話を聞いた明菜は、マジな顔つきになって、食べ始めた。時仁は、食べ終わると亜紀の家族のことを尋ねた。「僕たち以外、だれもいないみたいだけど、亜紀さんのご家族は？」亜紀が、返事した。「ママと弟は、買い物に出かけた。犬と猫は、自分の部屋で寝てるみたい」犬と聞いた時仁は、犬の話題に切り替えた。「どんな犬？俺んちも飼ってる。ミニチュアダックスフンド。ママが、飼ってるんだけど」

亜紀が、笑顔で返事した。「うちの犬は、シェルティー。名前は、スパイダー。コリー犬の小型って感じ。猫は、名前は、ピンク。猫種は、脚がすごく短いマンチカン。スパイダーは、ピンクのお父さんみたいで、とってもピンクをかわいがってくれるの。時仁くんちの犬の名前は？」時仁は、即座に返事した。「ママが、つけたんだけど、ゴローっていうんだ。なぜ、ゴローと名付けたかという、ママが言うには、スマップの稲垣吾郎のゴローなんだって。ママは、稲垣吾郎のファンなんだ」亜紀もスパイダーの名前の由来を話すことにした。「スパイダーは、みんなを守ってくれる正義の味方スパイダーマンのスパイダー。ピンクは、昭和のアイドル、ピンクレディーのピンク。明菜ちゃんちにも、ピンクのお友達のかわいい猫がいるのよ」明菜は、笑顔で返事した。「うちの、イチゴ。猫種は、サバトラ。名前の由来は、イチゴって、かわいって感じがするから」

14

亜紀は時仁の転校について聞いてみた。「時仁君は、なぜ、わざわざ、ド田舎の糸島に引っ越してきたの？福岡市のほうが、いろんな面でいいと思うんだけど」時仁は、ちょっと言葉に詰まった様子だった。「いや、まあ、俺は、福岡市でよかったんだけど、妹のためなんだ。妹は、体も弱く、学力も低いんだ。そのせいか、イジメにあっていたんだ。それで、田舎の糸島に引っ越してきたってわけ。糸島だからといって、イジメに合わないとは限らないけど、空気はいいし、自然と触れ合えるだろ。妹にとっては、よかったみたいだ。以前に比べたら、明るくなったよ」亜紀は、イジメは、どこの学校にもある問題だとつくづく実感した。亜紀は、か弱い妹に興味があった。「そうだったの。そいじゃ、今度は、妹さんもつれておいでよ。お友達になれるといいんだけど」

時仁は、元気よく返事した。「わかった。妹、連れて来るよ。小学4年生になるんだけど、とにかく、恥ずかしがりやで、人と話すのが苦手なんだ。名前は、真理っていうんだ。よろしく頼む」亜紀は、笑顔でうなずいた。「真理ちゃんね。楽しみだわ」亜紀も拓実の

ことで悩んでいたことを話すことにした。「弟の拓実は、小学1年生。拓実もちよっと変わってるの。とにかく女子みたいで歌とダンスが大好き。でも、最近は、ちょっと、男子っぽくなってきたけど。真理ちゃん、拓実のお友達になれるといいな〜」時仁は、うなずいた。「人には、個性がある。いろんな人がいて、いいんじゃないか？ もっと、個性が認められる社会になればいいと思う」亜紀がうなずいた。「そうね、これからは、私たちの時代が来るじゃない。みんなで力を合わせて、お互いの個性を認め合えるような社会を作っていこうじゃない」

時仁は、亜紀と友達になれたようでうれしかった。明菜から亜紀は大金持ちと聞かされていたが、家や身なりから判断して大金持ちには見えなかった。「亜紀さんは、意外と普通なんだね。もっと、贅沢な生活してるかと思った。気さくな人で良かった。最初は、嫌われるかと思って、不安だったんだ」亜紀は、ちょっと意味がつかめなかった。「まったく、普通よ。贅沢なんかしてない。あ〜、桂学園にかよってるから、そう思ったの？」時仁は、頭をかきながら返事した。「いや〜、まあ、チョ〜有名校だし、金持ちの学校だろ〜。それに、明菜さんが、亜紀さんちは、大金持ちと言ってたし」亜紀が、目を丸くすると、明菜が応答した。「亜紀ちゃんちのおじいちゃんは、大金持ちよね」亜紀は、おじいちゃんのことを言われて気まずくなった。「まあ、おじいちゃんね。でも、桂学園に通ってるのは、亡くなったお父さんが決めたの。お父さんには、感謝している」

15

時仁は、亜紀の将来のことを尋ねた。「亜紀さんは、頭がいいから、医者になるの？」亜紀は、首をかしげて返事した。「今のところ、AIロボットの研究をしようと思っているの。これからは、AI中心の社会になるから、いかに、AIを役立てていくかが、課題になると思う。今心配なことは、AIの能力が高まれば高まるほど、人間の活躍する場が、縮小される点なのよね。それと、みんながAIに頼るようになれば、頭を使わなくなって、知能が低下するような気がするの。だから、脳医学も勉強しようと思っている。AIと脳の研究は、同時にやる必要があると思う。人が、AIと共生できればいいけど、きっと、いろんな問題が出てくるような気がする」

頭のレベルが違いすぎる亜紀の話に何と応答すればいいか戸惑った。「AIロボットの研究か。さすが、天才。俺は、アホだから、難しいことはわからないけど、AIに依存する社会になることは予測できる。俺みたいな、アホにできる仕事は、なくなるかもしれないな。でも、アホは、アホなりに生きていけるさ。俺は、極楽とんぼだし」明菜は不安げな表情で尋ねた。「人間アイドルよりAIアイドルのほうが人気になったら、どうしよう。いったい、なにすりゃいいの？」亜紀もAIがどのように社会を大きく変えていく

か、予測できなかった。確かに、AIによって便利な生活ができるようになるとは思えたが、人ができる仕事については、やはり、悲観的未来が待っているような気がした。「そう、嘆かないでよ。AIは確かに人間より有能だし、いろんな仕事ができると思う。でも、人と人とのかわわりは、心じゃない。だから、心に関する仕事は、今後、ますます、重要になると思う」

時仁は、今一つ、納得できなかったが、AIと張り合っても、勝てるわけがないと思い、AIのことは気にしないことにした。「そうだよな。AIと人間は、別物だ。俺は、人間なんだ。人間は、人間らしく、生きていけばいいんだ。AIと張り合っても、しょうがないし」明菜もうなずいた。「人間のかわいらしさ、っていうのがあるわよね。それがわかってくれるファンもいると思う。よし、頑張るぞ〜。きっと、世界一のアイドルになってみせる」時仁も胸を張って将来を語った。「俺もやってやる。アロンの杖を探し出して、天下を取ってやる。今に見てろ」亜紀は、時仁の妄想には、あきれたが、二人の情熱にエールを送った。「その意気よ。人間には、人間の良さがある。AIを利用して、みんなが幸せになれる社会を創造すればいい。ガンバ。負けるな人間」

16

中共の狂気

8月10日（月）山の日。朝食を終えた亜紀は、平原歴史公園に出かけた。いつもの白いベンチに腰掛け、広場を見渡した。公園には、子供達の姿はなかった。3月のころから、コロナパンデミックで公園に遊びに来る子供達もいなくなった。青空を見上げた時、風来坊がやってくるような予感がすると東の青空から、一羽の鳥が公園の上空に現れた。いつもならば、公園の上空をカ〜、カ〜と人をバカにするような鳴き声を上げて二度旋回して下降してくるのだったが、今日は、特攻戦闘機が突っ込んでくるように、亜紀めがけて急降下してきた。いつもののんきな風来坊にしては、様子が変わったと思い、即座に立ち上がり、風来坊に大きく手を振った。ベンチ横にフワッと着地した風来坊は、ヨ〜と挨拶して、ベンチの背にヒョイと飛び乗った。

特攻隊員にでもなったような風来坊に尋ねた。「いつもの極楽とんぼの風来坊とちょっと違うじゃない。コロナに感染して、頭が変になったんじゃない。うつさないでよ」風来坊は、即座に否定した。「まったく、コロナ、コロナって、そう、騒ぐんじゃない。PCR検査しなくとも、陰性だ。熱もないし、この通り、すこぶる元気だ。そんな、ことより、一大事だ！」亜紀は、いつにない興奮した風来坊に尋ねた。「カラスにとって、一大事っ

て、何よ？」大きく深呼吸して、目をパチクリさせた風来坊は、「落ち着け、落ち着け」と自分に言い聞かせて、気持ちが少し落ち着くと返事した。「カラスのことじゃない。人間のことだ。聞いて驚くな、コンペーが戦争すると叫んでいる。ついに、発狂したぞ」

亜紀には、ちょっと、信じがたかった。亜紀は、風来坊を疑うような口調で質問した。「ちょっと、それはないんじゃない。戦争しても、アメリカ連合、いや、世界連合に、勝てるはずがない。さらに、7月からの洪水で農地は破壊され、食糧危機に陥ってるのよ。兵糧攻めにあえば、餓死するのは、中国人なのよ。そんなバカなことはしないでしょ」風来坊は、目を丸くして返事した。「確かに。アメリカに戦争を吹っ掛けるということは、世界を相手に戦争を吹っ掛けるのと同じだ。戦争する以前に、SWIFT、CHIPS からの破門を食らい、諸外国からの農産物も手に入らなくなれば、中国人の半分は、餓死する。万が一、本当にコンペーが発狂したのならば、核ミサイルをアメリカ、台湾、日本にもぶち込むかもしれない。そうなったら、日本は、おしまいだ。一刻も早く、コンペーを消さないと、手遅れになる」

17

コンペーは、本当に発狂したのか？ 冷静に考えれば、戦争できる国内情勢でない。約6億人は、貧困に陥っており、しかも、空前絶後の食糧危機に直面している。長江氾濫、干ばつ、バツタ、これらで農産物生産は半減する。こうなれば、江戸時代のような百姓一揆が起りかねない。万が一、三峡ダムが決壊すれば、約4億人の被災者が出る。こんな現状で、戦争などできるはずがない。いや、逆に、世界に救済を呼びかけなければならない。「ほら、バツタが大量発生して、穀物が食い荒らされてるじゃない。風来坊、偵察し来てよ。身軽なんでしょ」

風来坊は、あきれた顔で返事した。「おい、俺は、召使じゃないぞ。そんなことわ言われなくとも、中国の偵察は、コロナに感染しないように、3月からやっている。吉林省を偵察していた時、バツタに襲われて、危機一髪だった。今の中国は、国体をなしていない。野蛮人の集まりだ。山賊と同じだ。亜紀ちゃんも知ってるだろうが、中共のウイグル人への極悪非道は、人道的に絶対許されることではない。ウイグル人を奴隷のように働かせて、体調が悪くなれば、強制的に入院させ、治療と言って内臓を切り裂き、死亡させている。そして、あたかも、ブタの内臓を取り出すかのように、死体から内臓を取り出し、中国マフィアに売りさばっている。中共は、政府でも、何でもない。マフィアの親分みたいなものだ。中共は、人類のガンと言っていい。一刻も早く、壊滅せねばならん」

中共は、発狂した悪魔のような宗教団体と同然。これ以上、世界が、悪魔中共を野放しにしておけば、台湾も日本も攻撃され、いずれ、ウイグル人のように中共の奴隷にされてしまう。「風来坊。中共は、悪魔なのよ。アメリカは、どんな政策をとるつもり。やはり、経済制裁が最も効果があると思うけど」風来坊は、うなずいた。「今、南沙諸島に空母を派遣しているが、今すぐ、戦争するつもりはない。というのも、中共幹部の欧米資産凍結をやったところ、彼らは、悲鳴を上げているらしい。そして、コンペーの政策に反感を持ち始めているそうだ。さらに、中共のドル取引をストップさせたから、食糧危機の現状において、食糧物資の輸入もできなくなっている。このままだと、国民の半数は、餓死することになる。コンペーは、国民を見殺しにする気だろう」

18

もはや、発狂したコンペーは、人間ではない。中共幹部が、少しでも人間の心を持っているなら、きっと、国民の命を救うために、クーデターを起こすはず。最悪の場合、コンペーは、暗殺されるかも。亜紀は、トランプについて尋ねた。「トランプは、中共に対して、強行策をとっているけど、再選しそうかしら。今のところ、若干、バイデンが有利みたいね。バイデンは、中共の回し者なんでしょ」風来坊は、首を傾げて返事した。「いや〜、何とも言えない状況だ。バイデンが、中共の回し者かどうかは、よくわからんが、中共に甘いことは確かだ。民主党は、副大統領に、黒人女性のハリスを担ぎ上げてきた。これが、吉と出るか？ 凶と出るか？ 何とも言えない。ただ、中共に対する強硬策が、トランプ支持率を上げていることも事実だ。このまま、中共に対する経済制裁が成功し、中共がアメリカに譲歩するようになれば、トランプの再選が濃厚になる」

亜紀は、コンペーは、トランプに屈服するか、暗殺されるか、のいずれかと確信した。食糧危機を乗り切るには、世界からの食糧援助は不可欠。万が一、この現状で、世界を相手に戦争するなど国民に公言すれば、必ず、暗殺される。コンペーも、そこまでアホじゃないはず。「ところで、日本は、どうすればいいの？ 日本は、中共の肩を持つてことはないよね」風来坊が、即座に返事した。「それはない。確かに、中共と手を組んでる企業はあるが、アメリカを敵に回すような愚かなことはしない。きっと、アメリカの子分として、経済制裁にも、戦闘にも、しつぽを振って参戦するはずだ」

亜紀は、ちょっと不安になった。大企業は、中国に依存している。中国が崩壊したら、大企業は、どうなるのだろうか？「中国が崩壊すれば、日本の大企業は、どうなるの？ 大きな痛手をこうむるわね」風来坊は、うなずいた。「確かに、中国の労働力はグローバル企業に利益をもたらした。でも、中国の労働力は、ウイグル人の奴隷労働だ。このような人権に反した労働は、壊滅すべきなんだ。今、多くのグローバル企業は、中共に支配されている中国から、アメリカに支援を受けているインドに拠点を移行している。スズキは、30年以上も前から、インドの価値を見出し、インド市場を拡大してきた。今後、ますます、グローバル企業にとって、インド市場は不可欠な市場となる。今、やるべきことは、自由主義諸国家が一致団結して、中共独裁国家を徹底的に、叩き潰すことだ。そのためには、自衛隊も、米軍を支援すべきだ」

19

やはり、すべてのカギを握るのは、国家主席のコンペー。今のままでは、任期は死ぬまで延期される。これは、ガンを放置して、死を待つと同じ。「風来坊。カラスの大群でコンペーを攻撃できないの。中国のカラスに指令を出せないの？」呆れた表情の風来坊は、甲高い声で返事した。「いや、まあ、できないこともないが、肝心のコンペーの所在がわからない。きっと、暗殺を警戒して、身を隠しているんだな。しかも、金正恩のように何人ものダミーがいる。これじゃ、カラスもお手上げだ」亜紀は、がっかりしてしまった。やはり、悪党というのは、ずるがしこい。発狂したコンペーを一刻も早く抹殺しないと核ミサイルのボタンを押してしまう。これだけは、許してはならない。残された望みの綱は、北戴河（ほくたいが）会議における長老たちの意見。李克強（りこっきょう）の抵抗。中共の内部分裂。人民解放軍のクーデター。貧困層の打ちこわし。

ふと、三峡ダムが気がなった。「そういえば、三峡ダムは、まだ、大丈夫なの？ 崩壊し始めているそうだけど。三峡ダムが決壊すれば、中国人だけでなく、世界中から派遣されている職員も、被災するじゃない。戦争より、こっちのほうが心配じゃない？」風来坊は、天を仰いで返事した。「こればかりは、神に祈る以外ない。コンペーが、台湾の攻撃など考えずに、三峡ダム決壊の心配をすればいいが、このままだと、ダム決壊は、時間の問題だ。俺たちは、空を飛べるから、山奥に避難できるが、人間たちは、洪水に飲まれて、水死する。約4億人の被災者が出るかもしれん。恐ろしいことだ」

大洪水に飲まれもがき苦しむ人々の様子が脳裏に思い浮かぶと顔から血の気が引いた。「今の中国は、世界に助けを求めるべきなのよ。このままじゃ、食糧不足と三峡ダム決壊

で、多くの死者が出る。中共は、崩壊してほしいけど、国民は、助けてあげたいわ。何か、いい方法はないの？」風来坊は、首を左右に振った。「人間は、全く、愚かだ。多くの中国国民が、かわいそうだ。悪魔の中共のために、何の罪もない人々が、犬死をする。ダム決壊による洪水を避けるには、ダムを段階的に爆破する以外ない。果たして、コンペーにできるか？俺は、人間に生まれなくてよかった。亜紀ちゃんも、今度生まれてくるときは、カラスに生まれてくるといい。ちょっと言い過ぎたかな。カラスも、やれるだけのことはやる。今から、重慶の視察に行く。風来坊に、任せときな。きっと、うまくやってみせる。さらばじゃ」風来坊は、パタパタと羽ばたくと真っ青な天空に飛び立った。

20

お願い

亜紀は、風来坊が完全に消え去るまでしばらくぼんやりと青空を眺めていた。うなだれてしまった亜紀は、重たい脚を引きずりながら自宅に帰った。キッチンでは、さやかとアンナが、スイカを食べながら笑っていた。「ママたち、楽しそうね。いいことでもあったの？」アンナが、返事した。「いやね、免疫力を高めるには、笑うことが一番、ってさやかが言うから、サンドウィッチマンの漫才を思い出して、バカ笑いしてたのよ」亜紀は、三峡ダムの決壊を考えるとバカ笑いする気になれなかった。「亜紀は、悲しくて、笑う気になんか、全く、ならない。ア〜ア、どうして、大人って、バカなんだろう。大人になんか、なりたくないな〜」さやかが、声をかけた。「そう、嘆かずには、お話でもしましょう。落ち込んでばかりいると、免疫力が低下するんだから」

亜紀は、椅子に腰掛け、頬杖をついた。アンナは、思春期の悩みと思い、尋ねた。「何か、悩みでもあるの？失恋でもしたの？」亜紀は、恋をしたことがなかったから、失恋といわれても、ピンとこなかった。「そんなんじゃないよ。三峡ダムのことを考えてたの。もう、手遅れよ。このままじゃ、数億人が犠牲になる。人間って、どうして、こんなに、愚かなんだろう」アンナが、尋ねた。「三峡ダムって、何よ。ダムが、どうしたっていうのよ」さやかが、応答した。「中国の河北省にある世界一の発電を誇るダムよ。今、問題になってるのよ。もしかしたら、決壊するんじゃないかって」アンナは、中国のダムと聞いて、安心した。「中国のダムなの。だったら安心じゃない。だだっ広い中国だもの、ダムの一つや二つ、決壊しても、どおってことは、ないんじゃない」

さやかが、顔を左右に振った。「確かに中国はだだっ広いわよ。このだだっ広い中国で

さえ、甚大な被害が起きると予測されているのよ。なんと、ダム湖の広さは、琵琶湖の1.4倍もあるのよ。この巨大な貯水湖の水が、一気に下流に流れ出したら、長江沿いの武漢（ぶかん）、南京（なんきん）、上海（しゃんはい）、などは、洪水で全滅するのよ。被災者は、約4億人に及ぶと予測されているの。いったい、どうする気なのかしら」アンナが、あきれた顔で応答した。「そもそも、そんなバカでかいダムをつくらなければ、よかったんじゃない。中国人って、アホなんじゃない」さやかは、大きくなずいた。「まったくその通り。当時の全国人民代表大会では、約3割の人が反対したみたいなんだけど、結局は、賛成多数で、建設されたのよ」

21

アンナが、口をとがらせて言い放った。「みんなで決めたんだったら、自業自得じゃない。こうなったら、川沿いの人たちみんな、引っ越したらいいんじゃない。死ぬよりは、いいでしょ」さやかは、うなずいた。「そうよね。逃げるが勝ち、っていうし。でも、長江沿いの武漢、南京、上海は、大都市で人口が多いだけでなく、諸外国の支店や、工場があるのよ。だから、三峡ダムの問題は、中国だけの問題じゃないのよ。日本の大企業の支店や工場もあるから、日本政府にもかかわってくるの。アメリカ、ヨーロッパ、等も巻き込んだ21世紀最大の一大事件ってわけ。各国もどうしたらいいか、わからないのよ。このままだと空前絶後の死者が出ると思う」

アンナは、言い放った。「みんなで決めて、作ったんでしょ。だったら、文句、言えないんじゃない。決壊が時間の問題だったら、逃げる以外ないでしょ。ほかに、どんな方法があるというの？」亜紀が、応答した。「ママの言う通り。でも、もう、手遅れよ。そもそも、長江本流にバカでかいダムをつくるなんて、正気の沙汰じゃないのよ。いまさら、補強なんて、できないと思う。しかも、手抜き工事がなされているらしいの。現に、7月からの大雨で、長江沿いの都市で洪水が起きてるし。なんと、三峡ダムの上流にある重慶でも大洪水になってる。これ以上、大雨が続けば、きっと、ダムは決壊する。一刻も早く、避難すべきよ。神様でも、助けることはできないと思う」

さやかが、応答した。「そうね。問題は、コンペーよ。国民を助ける気持ちがあるのか、どうか？ 私たちにできることは、神に祈ることぐらい。コンペーが、人並の心を持っていること期待する以外ないわね」亜紀が、応答した。「神頼みしかないけど、そう、おじいちゃんなら、なんとかできるかも？ 大統領にも顔が利くんでしょ。ママ、おじいちゃんに、暗殺をお願いしてみようか？」アンナは、腰を抜かした。「何言ってるの。暗殺なんて、とんでもない。会長が、こんなバカげたことに、かかわるはずがないじゃない。会長はね、武器商人なのよ。米中戦争をまだか、まだかって、待ってるのよ。武器を売っ

て、ぼろもうけする気なんだから」さやかが、応答した。「会長は、戦争屋なのよ。人助けなんか、やるはずない。コンペー、バンザイなのよ」

22

亜紀には、おじいちゃんが極悪人だとは、思えなかった。「そうかな～～。おじいちゃんって、そんなに極悪人なの？ 亜紀が、お願いすれば、きっとわかってくれると思うんだけど。おじいちゃん、まだ、入院してるの？」さやかが、応答した。「悪運が強いというか、運がいいというか、会長は、無事、健康を取り戻して、退院したわ。今は、魔界島で、美女に囲まれて、優雅な生活を送ってるんじゃない」亜紀は、かすかな望みを感じていたが、やはり、不安は増大するばかりだった。「中国は、食糧危機で戦争どころじゃない。三峡ダムが決壊すれば、多くの死者が出る。コンペーは、わかってるはず。でも、コンペーは、ゾンビみたいなものだし。ア～～、ママだって、コンペーを抹殺したいでしょ」

アンナは、眉間にしわを寄せて、うなずいた。「確かに、ママも、コンペーは、憎いわよ。でも、コンペーちゃんは、国家主席だし、中共のメンツってものがあるじゃない。三峡ダムの建設は、中共の過ちだったとは、決して認めない。なるようにしか、ならいわよ」亜紀は食い下がった。「でも、今のままでは、コンペーは、いつまでも国家主席を続けるんでしょ。コンペーは、中国のガンなのよ。いや、人類のガンよ。なんの罪もないチベット人やウイグル人を殺してるのよ。こんな鬼畜を野放しにしていいの？ 一刻も早く消さなければ、犠牲者が増えるばかりよ」アンナは、亜紀の気持ちは分かったが、気持ちを落ち着けるように諭した。「亜紀のいうことも、もっともだけど、国家というものは、こんなものなのよ。どんなに国家が悪だと思っても、国民は国家に従わなければならないの。亜紀も大人になれば、わかるわよ」

さやかも亜紀をなだめた。「亜紀ちゃん、国民というのは、その国家の運命でしか、生きていけないのよ。第二次世界大戦で、多くの国民は戦死したでしょ。でも、これは、運命なのよ。当時は、子供も大人も、戦争バンザイと言って戦争したの。か弱い女性ができることは、ワラ人形を作って、鬼畜が一刻も早く天国に召されることを祈ること以外

ないの。早速、ワラ人形を作りましょう」亜紀は、アンナとさやかの弱腰にあきれてしまった。「何が、ワラ人形よ。そんなことぐらいで、鬼畜が死ぬわけがない。とにかく、おじいちゃんにお願いしたい。ママ、おじいちゃんにお願いして。ママがお願いすれば、きつとうなずくはず。お願い、ママ」

23

アンナは、亜紀がここまで頑固だとは思わなかった。「お願いといわれても、会長と連絡できないし。できることといえば、のんきな執事を呼び寄せるぐらいよ」亜紀が、立ち上がって返事した。「そいじゃ、執事呼んで。執事から、おじいちゃんにお願いしてもらえばいい。早く、呼んで」アンナは、さやかに援護を求めた。「さやか、何とか言ってよ」さやかも亜紀の頑固さには、度肝を抜かれた。このままでは、真夜中までお願いが続くように思えた。「アンナ、今回だけ、亜紀の気持ちを汲むということで、執事呼んであげたら。執事が何というか、わかんないけど」亜紀は、両手を合わせて、頭を下げた。「ママ、お願い、この通り」アンナは、自分の部屋に向かい、バックから緊急用の小さな通信機を持ってきた。「ア～、こんなことで、執事呼んだら、怒鳴られるんじゃないかな～」アンナは、通信機の赤いボタンを押すのをためらった。

亜紀が、叫んだ。「なによ、こんなことって。人類の一大事じゃない。早く、ボタン、押してよ」アンナは、しぶしぶボタンを押した。「押したわよ。明日には、飛んでやってくるんじゃない」亜紀が、明日と聞いて、エ～～と悲鳴を上げた。「明日なの。緊急なのよ。すぐに来てよ」さやかが、なだめた。「亜紀ちゃん、執事は、魔界島にいるのよ。魔界島って、屋久島より南にあるの。飛行機でやってきたとしても、明日が精いっぱいよ。すぐには、やってこれないわよ」亜紀は、がっかりしてしまった。「何が、緊急連絡よ。緊急なのよ、1時間以内に来るのが当然じゃない。ピザクックは、30分もあれば、配達してくれるんだから。全く、役立たず」アンナは、亜紀のせっかちには呆れた。「そう、焦らずに。待てば海路の日和あり、っていうじゃない。必ず、執事は来るから、今日は、ゆっくり寝て、明日、お願いすればいい。あ、もうこんな時間」

三人は、昼食をとることにした。「亜紀、おなかすいたでしょ。そうだ、亜紀の大好きなピザにしよう。30分もすれば、配達してくれるし」アンナは、早速ピザクックに注文した。しばらく待っていると、インターホンが鳴った。アンナが、応答した。「エ、今日

は、バカに早いわね」アンナが、玄関にかけていった。アンナは、ドアに向かって声をかけた。「どうぞ」ドアが開かれると上川のような中年のイケメンが入ってきた。アンナは、ピザの配達でないことに気づいた。「どなた？」イケメンは、即座に返事した。「緊急連絡を受けましたもので、お伺いいたしました。執事の西園と申します」アンナは、腰を抜かした。「エ〜、30分で、魔界島からやってきたの。スーパーマン。信じられな〜い」イケメン執事は、笑顔で返事した。「まさか。わたくしは、人間です。そんなことはできません。天神事務所から、高速を使ってやってきました」

24

イケメン執事に気をよくしたアンナは、キッチンに案内した。「亜紀、待ちに待った、お客さんよ」亜紀は、ピザクックだと思い、大きな声で返事した。「わかった、今行く」亜紀が立ち上がり、振り向いたとき、背の高い紳士の姿が目に入った。アンナが、イケメン執事を紹介した。「亜紀、緊急連絡を受けて、来てく出さった西園さん。よかったね」亜紀は、あっけにと取られて挨拶もできなかった。アンナは、声をかけた。「亜紀、ご挨拶は？」亜紀は、我に返り挨拶した。「亜紀と申します。よろしく申し上げます」亜紀は、頭を深々と下げた。イケメン執事が席につくとアンナが、さやかを紹介した。「こちらは、親友のさやか。同居してるんです。気にしないでください」イケメン執事は、早速、用件を尋ねた。「早速ですが、ご用件は？」アンナは、何と云えばいいか、惑ってしまった。

アンナは、直接、亜紀にお願いさせることにした。「実は、用件というのは、この子のお願いを会長に伝えてほしいのです。亜紀、わかりやすく、お話しするのよ」イケメン執事は、うなずいたが、即座に返事した。「申し訳ありませんが、お嬢様以外の依頼を承ることはできません」がっかりした表情の亜紀を気遣って、アンナは返事した。「依頼は、私です。私って、口下手でしょ。亜紀は、説明が上手だから、私に代わって、話してくれるってわけ。だから、聞いてあげて」イケメン執事は、うなずいた。「さようございませうか。お嬢様の依頼ということであれば、承ります。どのようなご用件でしょう」イケメン執事は、ボイスレコーダーのスイッチを入れ、テーブルに置いた。亜紀は、大きく深呼吸して、背筋を伸ばした。単刀直入にお願いすることにした。「おじいさま、お願いがあります。お願いというのは、中国共産党国家主席、コンペーを暗殺してください」

執事は、いったん、スイッチを切った。「コンペーの暗殺、ですね」亜紀は、マジな顔つきでイケメン執事を見つめた。「では、理由をおっしゃってください」イケメン執事は、スイッチを入れた。亜紀は、簡潔に理由を述べることにした。「一つ目、コンペーは、多くのチベット人、ウイグル人を虐殺した。二つ目、台湾を破壊しようとしている。三つ

目、三峡ダム決壊を国民に知らせず、数千万人を見殺しにしようとしている。この3点です」イケメン執事は、うなずき、スイッチを切った。アンナに再確認した。「お嬢様。こちらの依頼を会長にお届すればよろしんですね」手を震わせ、アンナは、うなずいた。「は、はい。会長に伝えてください。よろしくお願いします」執事は、うなずき、ボイスレコーダーを胸の内ポケットにしまった。その時、インターホンが鳴った。そして謝罪の声が響いた。「遅くなりまして、申し訳ありません」

25

アンナは、引きつった顔を笑顔に変えて、立ち上がった。「西園さん、ピザを召し上がってください」アンナは、駆け足で玄関に向かった。亜紀も後をって玄関に向かった。二人は、それぞれLサイズのピザを運んできた。アンナは、ピザをテーブルに置くと食器棚からグラスを取り出した。グラスに麦茶を注ぎ、イケメン執事の前に差し出した。「食事ぐらいは、いいでしょ。召し上がってください」イケメン執事は、笑顔で返事した。「それでは、ありがたくいただきます」アンナは、小皿にピザをよそった。アンナは、デートでもしているかのように笑顔で話し始めた。「いつもの執事の方は、お休みですか？」イケメン執事は、返事した。「いいえ、西田さんは、魔界島にいらっやいます。緊急の場合は、私がお伺いすることになっております」

アンナは、うなずき、話を続けた。「西園さんは、独身でいらっやいますか？」イケメン執事は、一瞬、顔を引きつらせたが、冷静に返事した。「はい」アンナの笑顔に、ますます、輝きが増した。「イケメンなのに、独身。もったいないこと。かなりのメンクイなのね。いつもは、どんなお仕事をなされていらっやるの？」イケメン執事は、一瞬、口ごもった。「指示に従って仕事をしています。内容は、お嬢様といえども、お話しできません」アンナは、会長の執事であることを考えれば、かなりヤバイ仕事だと察した。「そうですね。お仕事のお話は、やめましょう。ご趣味は？」 unnecessaryな話は、禁じられていたが、お嬢様ということで話を合わせることにした。「趣味は、射撃です」さやかは、しつこいアンナをたしなめた。「アンナ、そのくらいにきなさい。食事できないじゃない」

イケメン執事は、即座に応答した。「そんなことはございません。お嬢様をお守りするのが役目ですから。何なりとお申し付けください」アンナは、イケメンに舞い上がっていることに気づき、口をつぐんだ。亜紀が口をはさんだ。「西園さん、おじいちゃん、元気？」イケメン執事は、笑顔で返事した。「とても、お元気でいらっやいます。ほかに、何かお伝えすることがあれば、おっしゃってください」亜紀は、一度でいいから、魔界島に行ってみたかった。「魔界島に遊びに行きたいんだけど、おじいちゃん、許してくれるかな〜」イケメン執事は、うなずき、アンナに確認した。「お嬢様のご意向というこ

とですか？」アンナは、うなずいた。イケメン執事は、応答した。「かしこまりました。会長にお伝えいたします」アンナは、笑顔を見せない執事に冗談を言った。「まさか、ゲイってことはないわよね」生真面目なイケメン執事もこの質問には、笑顔を作った。「ご心配なく。ノーマルです」

26

アンナは、イケメン執事に確認した。「これからも、緊急時には、西園さんが来てくれるのよね」イケメン執事は、マジな顔つきで返事した。「さようでございます。なんなりとお申し付けくださいませ」アンナは、笑顔を作った。「よかった。今日は、幸運の日だね」さやかは、あきれた顔でアンナを見つめた。イケメン執事は、背筋を伸ばし、挨拶をした。「ごちそうさまでした。それでは、失礼いたします。何かありましたら、遠慮なく、お呼びくださいませ」イケメン執事は、席を立ち、一礼すると玄関に向かった。アンナも席を立つと彼氏を追うように後を追った。イケメン執事は、玄関口で深々とお辞儀をすると西側の駐車場に向かった。すぐに、玄関を飛び出したアンナは、イケメン執事の後姿に手を振った。赤いフェラーリがサックス音を響かせると静かに走り出した。アンナは、夢心地でニコッと笑顔を作った。

アンナが、テーブルに戻るとさやかは嫌みを言った。「ちょっと、何か勘違いしてない。西園さんは、仕事でやってきてるに過ぎないのよ。のぼせちゃって。まったく、バッカじゃないの」アンナの耳には、さやかの言葉が届いていなかった。亜紀もアンナの浮かれた様子にあきれていた。「ママ、ママ、聞こえてるの？」アンナは、ふと、我に返った。「何か言った？」さやかは、もう一度嫌みを言った。「あのね～～、西園さんは、緊急ボタンを押したから、やってきたに過ぎないの。何か、勘違いしてない。今後、気軽にボタンを押さないようにね」アンナは、言い返した。「なによ、その言い方。やさしくて、素敵な方だな～～、と思っただけじゃない。別に、浮気してるわけじゃないし～～」

亜紀が、二人が喧嘩しないように、話に割り込んだ。「おじいちゃん、お願い聞いてくれるかな～～」アンナは、応答した。「一応、お願いしたことだし。これで、気が済んだでしょ。もうこれ以上、コンペーちゃんの話は、やめてよ」亜紀は、お願いができたことで、コンペーのことは、どうでもいいように思えてきた。それより、夏休みの間に、魔界島に行きたくなった。「ママ、魔界島ってどんどこ。夏休みの間に、いけるかな～～？」アンナは、さやかに目配せした。さやかが、代わりに返事した。「一度しか行ったことがないけど、だれでもがいけるところじゃないみたい。あまり、期待しないほうがいいかも？」亜紀は、どんどこだったか聞いてみた。「一度、

行ったんでしょ。どんなところだった？ 大きい島？ 小さい島？ ジングルみたいなところ？ 小鳥とか、動物はいるの？」

27

さやかが、思い出しながら話し始めた。「そうね～。地球とは思えないところだった。大きな門を入ると金色のラクダと銀色のラクダがいて、二人を乗せてくれたの。公園の小道の両側には、ロボのお花が咲いていて、歌を歌って、歓迎してくれた。あ、そう、プール横の parasol で休んでいると、かわいいロボの女の子がやってきて、昼食の錠剤をくれたのよ。しばらく、休憩していると、突然、体が軽くなって、空を飛べたの。二人が、キャ～キャ～言っていると、キューピットが現れて、会長のところに案内してくれたっけ。こんなところ」亜紀は、信じられなかった。「それって、マジ？ うそでしょ。作り話でしょ」アンナが、返答した。「嘘みただけけど、本当なのよ」

さやかが、話を続けた。「きっと、あの島は、人工島なのよ。しかも、重力を自由に操作できる装置があるのね。奇妙な体験をして、楽しかったけど、さやかは、二度と、行きたくない」亜紀は、話を聞いて、ますます行きたくなった。「亜紀も行きたいな～～。おじいちゃん、招待してくれないかな～～」アンナもさやかと同感だった。「別に見るところもないし、あまり期待しないほうがいいかも」亜紀の頭には、奇妙な魔界島の上空を飛んでる笑顔の自分の姿が浮かんでいた。「今日から、毎日、魔界島に行けますように、って神様をお願いします」アンナは、話題を替えることにした。「拓実も1年生になったことだし、夏休みの思い出を作らなくっちゃね。三密を避けて、遊べるところって、どこがある？ さやか？」さやかもコロナにはうんざりしていた。パ～～と羽を伸ばしたかった。「ヘリで九州一周ってのは、どう？」亜紀が、即座に反対した。「嫌よ、墜落したらどうするの？」

アンナが、提案した。「キャンピングカーで、温泉巡りする？」亜紀は賛成した。「それって、楽しそう。いつから、行く？」アンナは、応答した。「善は急げね。お盆が済んだら、出かけよう～～」さやかが、不安を述べた。「でも、キャンピングカーって、どこで借りればいいのか？ それに、女性と子供だけで、大丈夫？ 運転は、だれがするの？ さやかは、大きな車は、運転できないよ」アンナが、首をかしげたが、即座に、笑顔を作った。「これって、緊急事態よね。西園さんに相談しましょう」亜紀は、賛成した。「それがいい。西園さん、やさしそうだし」さやかも賛成した。「運転は、アンナと西園さんが、交代でやればいいんじゃない。そうと決まれば、どこの温泉に行くか？ みんなで決めま

しょう。行くとしても、九州内がいいと思う。別府温泉か？ 雲仙温泉か？ 杖立温泉か？ 黒川温泉か？ ほかに行きたいところは？」亜紀は、温泉に詳しくなかった。「亜紀は、ママが決めたところでいい。早く、行きたいな～～」

お願い

著 春日信彦

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
